

- 神 楽 名 ^{しもの} 下野神楽
- 伝 承 地 下野地区
白杵郡高千穂町大字下野
- 指 定 等 国指定重要無形民俗文化財
- 伝承団体 下野神楽保存会
代表 江藤 俊夫



地割

□神楽の概要・由来・その他

高千穂神楽^{かみの たばる}の上野・田原系統に属する神楽である。下野地区は高千穂窯入り茶の生産が盛んな地区で、下野東公民館と下野西公民館で構成されている。夜神楽は13の小組廻しの当番制で、氏子主催として執り行われている。

区内には幕府御用の測量隊・伊能忠敬が宿泊した延岡藩小侍・旧佐藤新四郎宅をはじめ^{げってんとう ろくじぞうとう}月天塔や六地藏塔など、多くの史跡文化財が大切に保存されている。氏神社^{うじがみしゃ}の下野八幡大神社は、^{けんきゆう}建久三年（1192）に高千穂領主・高千穂太郎惟元^{これもと}が勧請し、高千穂政信が境内を整え社殿を建立したといわれる。

下野神楽では「天照皇大神神像^{はこみや}管宮」が民家に祭祀されており、村役がお迎えに行き背負って神社にお連れする。神社で神事が行われ、本殿に安置されているご神面を神楽神輿^{あげこし}の「上輿」に移し、神楽宿に向けて御神幸が出發する。下野では地区の保育園年長組も御神幸に参列し、道神楽を舞う。

□芸能の機会・場所

- 下野夜神楽

11月22日～23日 下野八幡大神社にて神事後、神楽宿にて奉納

- 歳旦祭^{さいたんさい}、祈念祭、春大祭、秋大祭^{しきさんばん}に「式三番」を奉納

□演目一覧

宮神事	^{ごしんこう} 御神幸・ ^{みちかぐら} 道神楽	^{まひ} 舞込み	^{みこうや} 御光屋始め	^{ひこまい} 彦舞	^{たいどの} 太伊殿	神おろし		
鎮守	^{すぎのぼり} 杉登	^{ちがため} 地固	^{ひかんぜ} 幣神添	^{ほんはな} 本花	^{ちわり} 地割	^{そではな} 袖花	^{やつばち} 八鉢	^{いわくぐり} 岩潜り
住吉	^{たちかんぜ} 太刀神添	^{ごしんたい} 御神体	^{ゆみしょうご} 弓正護	^{しちきじん} 七貴神	^{やまもり} 山森	^{おきえ} 沖逢	^{だいじん} 大神	
武智	柴引き	伊勢	^{たちからお} 手力男	^{うずめ} 鈿女	^{とと} 戸取り	^{まいびらき} 舞開	^ひ 日の前	五穀
御柴	^{しめぐち} 注連口	^{くりおろし} 繰下し	^{くもおろし} 雲下し					

※平成27年11月の神楽奉納番付に基づく

□演目の特徴

前半は、祓い清めの舞や諸々の神を招く舞が続く。「地割」は土地の神である山神が、耕地の割り替えを行う神楽で、竈祭の神楽としても奉納される。台所で地割荒神を祀る杯事後、台所から神主、太刀・弓の正護と荒神が舞込む。この時に上野・田原地区では台所役の女性が荒神の袴裾を引っ張り、邪魔をして笑いを誘う。舞の終了後、山神とそれを鎮める幣帛の威信と地主神の由来を述べる神主・荒神の間答が行われる。

深夜には、伊弉那岐・伊弉那美神が仲良く新穀で酒をこす「御神体」がユーモラスな所作で舞われ、夜明けには岩戸開きの神話にちなんだ「岩戸五番」が奉納される。下野神楽では、その後に新嘗祭を兼ねた「五穀」が奉納さる。最後に「注連口」「繰下し」「雲下し」で神々を送って終了する。

□その他の特徴

- 面：猿田彦、地割荒神、七貴神、御神体、山森、柴引き、手力男、鈿女、戸取 等
- 楽：太鼓、笛
- 装束：白衣、白袴、素襖、千早、裁着袴、毛笠、どっさり、烏帽子、天冠 等
- 採り物；鈴、榊、扇、御幣、杖（荒神杖等）、弓、矢、刀、麻緒、折敷、帯 等
- 文書：「社家立合神楽神事の事は天正3年より安永2年まで社家立合也」と記された「八幡宮御記録」をはじめ、明治17年の「御神楽立歌」、明治25年の「願祝子取締規則」などの神楽記録が残されている。

□伝承の現状・課題

保存会の会員数は25名、夜神楽の練習は一ヶ月前より始められる。練習には小・中・高校生も参加している。神楽宿は、その年の事情により民家と公民館が併用されているが、天井の高さや核家族化にともなう家の間取りの変化などのため、民家における夜神楽奉納は将来的には難しくなると思われる。



岩潜り



御神体



伊勢